中国浙江省における
体育授業研究の現状と課題
：中国杭州市の
初任者研修における授業研究

林楠（中国浙江大学教育学院体育学系）
木原成一郎（広島大学大学院教育学研究科）

1. 問題の所在

近年、中国では、授業研究が教師の専門的発達や現職研修の改革を促進する方法として、注目されている。
現在の中国においては、授業研究を現職教育に活用する理論的、実践的な研究について、一定の成果がある（顧泠沅ら、2003；肖建民、2004；斎渝華ら、2010；夏玉成ら、2012）。

一方、**授業研究を体育教師の現職研修に応用する研究は少なく、特に実証的研究が少ない現状**がある。本研究は、授業研究が初任者体育教師の反省能力の発展を促進することに注目して、その効果を実証的に考察した。

浙江省の現職研修制度

項目	時間数	形式	時期	内容
校内研修	学校で決定	学校で実施	勤務時間内	①体育教師対象：実技研修、指導主事、ベテラン教師の講義。②教師全員対象：実践研究の方法や教育機器の応用、校務分掌の研修など。
必修科目	90時間	12日間集中講義	夏季休暇、冬季休暇または勤務時間内	市の教育局が計画し、実施する。教科に関する理論及び実践科目。理論科目は、主に大学の教員、指導主事、ベテラン教師の講義。実践科目は、主に研究授業とそのあとの協議会。
選択科目	大学が指定	大学で受講	夏季休暇、冬季休暇または勤務時間内	大学が国、省または市レベルの研修講習を申請し、浙江省教育庁が認可する。
在職大学院など	2年間	大学院の授業を受講	夏季休暇、冬季休暇	各大学が提供する大学院プログラム。専門職学院の「体育修士」を取得できる。

①毎年最低24時間、5年間で最低360時間を受講しなければならない。
②校内研修は、5年間で最低120時間である。
③必修科目と選択科目合わせて、5年間で最低240時間である。
④新任教師は採用された最初の1年間で計180時間（校内研修は90時間＋必修科目90時間）を受講しなければならない。この180時間は、5年間で受講する最低360時間には含まれない。

新任教師研修の概要

＜中国杭州市の小学校体育教師の初任者研修の概要＞

・杭州市が指定した杭州師範大学での講習：理論研修：共通教育科目：90時間。

・所属学校での研修：新任教師に1名の所属学校また同じ区で他の学校の中堅教師をメンターとして指定され、授業研究と協議会をセットで１年に1回、以下のように展開する：

①事前に研修テーマを確定する；
②指導案を作成する；
③公開授業を実践しメンターの中堅教師が授業を参観する；
④参観したメンターの中堅教師と実践した新任教師が一緒に協議会を行い授業の反省をする。

2. 研究の目的

本研究の目的は、初任者体育教師を対象として、授業研究による彼らの「反省能力」（reflective ability）の変化及びその特徴を明らかにすることである。

そのため、中国浙江省杭州市X区にあるA小学校、B小学校の体育グループを例にして、それぞれ2015年12月から2016年3月まで2期の授業研究を実施し、2つの体育グループにいる4人の初任者体育教師を対象した。

3. 研究の方法

3.1. 調査対象の説明

- A校の授業研究グループ：4人から構成され、そのメンバーは大学教員1名と体育教師3名

  B校の授業研究グループ：6人から構成され、そのメンバーは大学教員1名、体育教師5名

- A、B校授業研究グループに属する大学教師は、杭州市におけるC大学で体育教師教育に従事する本研究の研究者であり、授業研究の実施と運営を担当した。 C大学の大学院生1名は授業研究の実施過程のビデオ録画と音声のレコーディングを担当した。

- また、4名の初任者体育教師の教職経験年数は1から2年であった。具体的には、**表1**のようであった。

表1　対象者の属性

メンバー	年齢	性別	教職経験年数	分担
A校W教師	25	女	2年	授業者
A校B教師	25	男	1年	授業者
A校F教師	35	女	10年	観察者
B校P教師	25	男	2年	授業者
B校S教師	24	女	1年	授業者
B校T教師	40	男	16年	観察者
B校Y教師	40	女	16年	観察者
B校L教師	46	男	21年	観察者

3. 研究の方法

3.2. 授業研究の実施

A、B両校ごとに、以下の主な授業研究のステップが2期にわたり繰り返して実施された：

1. 授業研究グループは協同的に研究テーマを確立する；
2. 授業研究グループは協同的に単元計画と指導案を作成する；
3. 授業研究グループの1名の初任者体育教師が授業を実施し、他のメンバーはその授業を観察する。研究授業後の協議会を実施し、協同的に単元計画や指導案を修正する；
4. 授業研究グループにいるもう1名の初任者体育教師が授業を再び実施し、他のメンバーを観察する。研究授業後の協議会を実施し、まとめ、1期の授業研究を終了する。

表2　授業研究の実施及びデータの収集

学校	実施内容	実施時間		研究テーマ		データ収集
		1期目	2期目	1期目	2期目	
A小学	研究テーマ事前研修会	2015.12.2	2016.3.2	1―2年生縄跳びの練習方法の有効性	1―2年生サッカの練習方法の有効性	なし
	指導案事前研修会	2015.12.9	2016.3.9			反省日記
	1回目の授業実施及び協議会	2015.12.16	2016.3.16			反省日記
	2回目の授業実施及び協議会	2015.12.23	2016.3.23			反省日記
B小学	研究テーマ協議会	2015.11.10	2016.3.10	1―2年生障害走の練習方法の有効性	1―2年生バスケットボールの練習方法の有効性	なし
	指導案協議会	2015.11.17	2016.3.17			反省日記
	1回目の授業実施及び協議会	2015.11.24	2016.3.24			反省日記
	2回目の授業実施及び協議会	2015.12.1	2016.3.31			反省日記

研究授業・映像

A小学校の研究授業について

「縄跳び」の1回目と2回目の授業では主な変化について、以下の3点がある：

- 2回目の授業では、学生の意欲のために、「基本の2」部分に組合せ跳びの創作を増加した。
- 2回目の授業では、 「基本の1」1人1縄跳びの基本的な動作の練習では、教師が呼んだリズムによって、学生が跳んだ。
- 2回目の授業では、 1人1人の練習時間を保証するため、「基本の2」練習では、１人が連続で2回の跳び機会（1回で6回まで跳んで）が制限された。

- 「サッカーボール」の1回目と2回目の授業では主な変化について、以下の2点がある：
- 2回目の授業では、学生の意欲のために、 「基本の3」足内側でのキック（直線）のリレーゲームを増加した。
- 2回目の授業では、キックの力をコントロールするため、「基本の2（1）」の部分で学生に違う力でのキックをやって見ることを要求された。

B小学校の研究授業について

「障害物競走」の1回目と2回目の授業では主な変化について、以下の2点がある：

- 2回目の授業では、学生の意欲のために、「基本の2（2）」の部分にチームごとで新しい障害物の創作を増加した。
- 2回目の授業では、時間のため、「基本の1」の部分に行った「障害物の真似」の練習が準備部分に移動された。

- 「バスケットボール」の1回目と2回目の授業では主な変化について、以下の2点がある：
- 2回目の授業では、オフェンスの学生を広く移動させるため、ゲームを行う場所を拡大した。
- 2回目の授業では、準備部分の「ボールの練習」を学生に体験させることを主として、動作の基準の達成は要求されない。

3.3．データの収集と分析

- A、B両校の授業研究グループにいる4人の初任者体育教師が、2期にわたり授業研究が実施した。１期と2期を合計すると、それぞれの学校ごとに、2回の単元計画と指導案の事前研修会、及び4回の研究授業後の協議会が行われた。
- それぞれの事前研修会と協議会後にすぐ反省日記を書き、提出することが実施された。全体として、4人の初任者体育教師の2期にわたる授業研究に対する反省日記について、 A、B両校で合計24編を収集して、分析した。

3.3．データの収集と分析

反省日記から収集した記述は教師－時間－事件の順で、以下のようにデータ整理された：

1. 4人の初任者体育教師をB氏、W氏、P氏、S氏とした。
2. 各氏について１期目と2期目の授業研究ごとに区分した。
3. 反省日記を意味のまとまりのある文章としての内容に区切った。

全体で、203個の反省記述が抽出された（1期目85個、2期目118個）。例えば、B2-3はB教師が2期目の授業研究に書いた3個目の反省記述を意味している。

4. 結果と考察

1)反省レベルの変化

Sparks-Langerら（1990）は、学生の反省的な思考（reflective thinking）の促進を目的とする教員養成カリキュラムを開発して、著しい効果を得た。

また、そのカリキュラムの実施において、学生が授業における意思決定の基礎となる教育原則/理論、教育原則/理論の適用に影響する文脈的要因、教授実践を取り巻く道徳的、倫理的、政治的な問題を反省する能力を評価するため、「反省的な思考の枠組み（ framework for reflective thinking ）」を開発した。

そこにはそれは、**表3**に示したように、7つのレベルが含まれた。

表3 「反省的な思考の枠組み」（Sparks-Langerら，1990）

レベル	記述	英語表記
1	記述言語なし	no descriptive language
2	シンプルな、素人の説明	simple, layperson description
3	適切な用語でラベル付けされたイベント	events labeled with appropriate terms
4	根拠として個人的な好みか、伝統的な説明のどちらかで説明	explanation with tradition or personal preference given as the rationale
5	根拠として原理または理論により説明	explanation with principle or theory given as the rationale
6	原理/理論による説明と文脈要因の考慮	explanation with principle/ theory and consideration of context factors
7	倫理的、道徳的、政治的な問題を考慮した説明	explanation with consideration of ethical, moral, political issues

4. 結果と考察

1)反省レベルの変化

- Sparks-Langer（1990）の開発したFramework for Reflective Thinking尺度で反省文の記述を分類し、4人の初任者体育教師の反省レベルの変化を考察した。
- 授業に直接関係していない、教師の個人的な感想が書かれた記述がある。例えば、S1-28「授業研究において、先生たちと授業の内容や方法を一緒にディスカッションして、自分自身の欠如を見て、非常に勉強になりました」である。したがって、このような授業に直接関係していない記述を排除し、最終的に194個（1期目80個、2期目114個）をコーディングした。
- コーディングの作業は、 9年間小学校体育教師の現職研修に従事している教諭、C大学院生の計2人による合意のもとで行った。

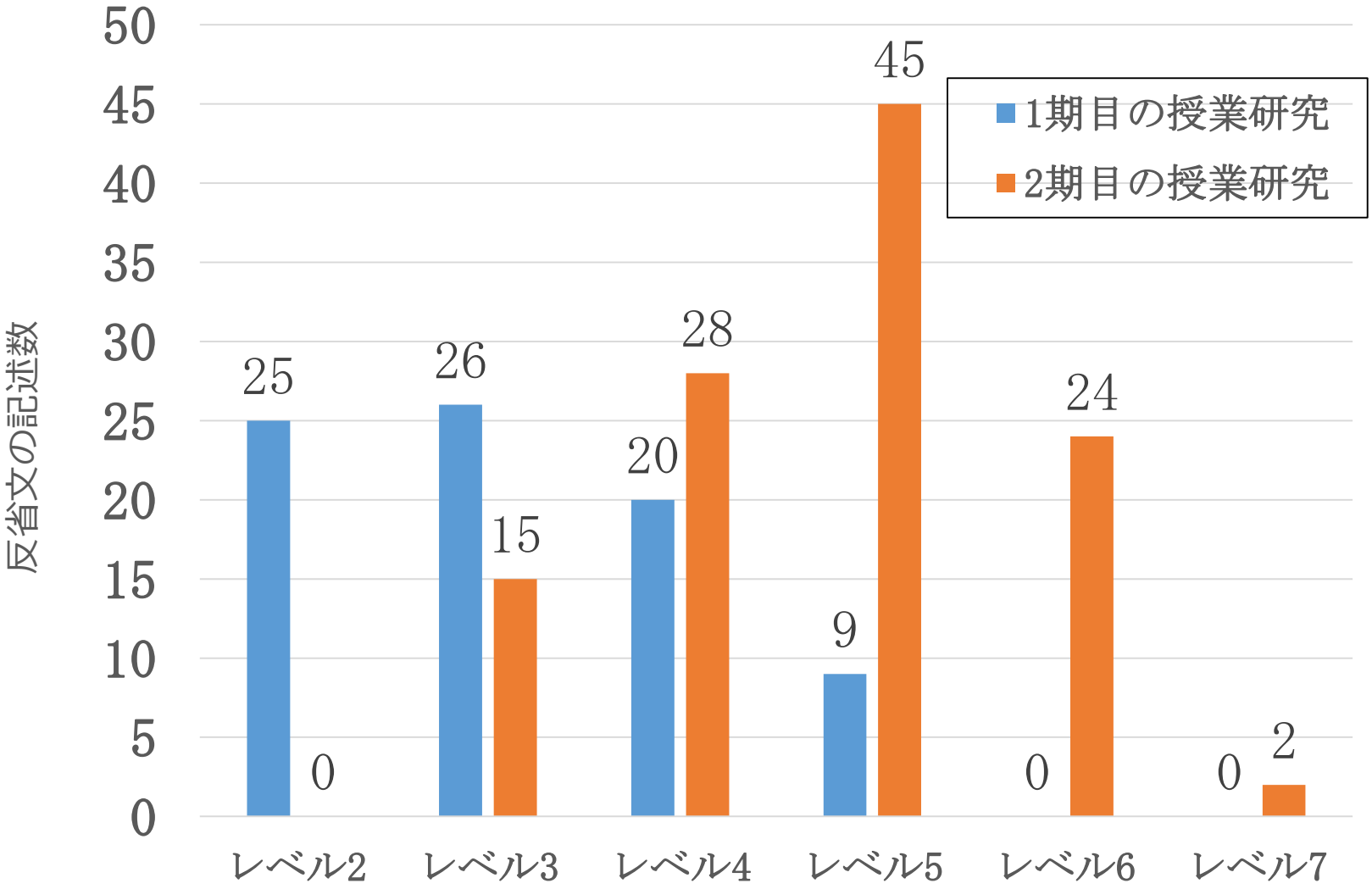

図1　全体的に反省レベルの変化

4. 結果と考察

1)反省レベルの変化

４人の初任者体育教師は、授業に関わる記述があったので、Level1の「記述言語なし」はなかった。それで、図に示したように、 Level2からLevel7までしか見られなかった。

図1に示されるように、第1期の授業研究では、4人の反省記述はLevel 3、 Level 2、及びLevel 4が多い。一方、Level 5は少なく、 Level 6とLevel 7はなかった。

この段階では、初任者体育教師は、授業を反省する能力を持っているが、授業に関わることに対して教育学の用語を使って簡単に説明し、主観的に説明する傾向があったと考えられる。

4. 結果と考察

1)反省レベルの変化

第2期の授業研究では、4人の初任者体育教師の反省記述について、Level5、 Level4、及びLevel6に占める割合が増加した一方、 Level2 とLevel3に占める割合が減少した。これは、4人の全体では、反省レベルが高くなって、教育原則/理論のもとで授業のことを説明する傾向になったと考えられた。

また、4人の第１期と第2期での反省レベルの平均値について、Paired-Samples T testを行なった。その結果、４人の反省レベルについて、第2期は，第1期もより有意に高い値を示した。

表4 Paired-Samples T test結果

対象	反省レベルの得点	
	1期目	2期目
B教師	2.6	4.4
W教師	3.3	5.1
P教師	3.6	4.8
S教師	3.1	4.6
N	4	4
M	3.2	4.7
Standard Deviation	.4203	.2986
Standard Error of Mean	.2102	.1493
t	-10.967	
P	.002	

4. 結果と考察

1)反省レベルの変化

しかし、1期目、2期目両方とも、全体的に反省レベルが低いといえる。

→初任者体育教師が十分な時間を確保して研究授業を省察し、反省日記を書くための時間保証が難しいことや、初任の体育教師が全体的に研究授業の省察に関わる理論や知識を十分に持っていないことが、その結果を生む要因であると推察された。

4. 結果と考察

2)反省内容の変化

KJ法を用いて帰納的に分類し、４人の初任者体育教師の反省内容の変化を考察した。

その結果について、第1期より、第2期の大、中、小のカテゴリーの数が多くなり、反省内容が多様になるように変化することが明らかになった。

表5　カテゴリー分類（実数 個，割合 %）

	1期目			2期目		
	大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー	大カテゴリー	中カテゴリー	小カテゴリー
B教師	4	7	10	6	10	15
W教師	4	8	13	5	11	18
P教師	4	6	9	5	8	12
S教師	5	11	16	6	10	16
合計	17	32	48	22	39	61

4. 結果と考察

2)反省内容の変化

- １回目より、2回目の反省内容について、「 3. 子どもの実態を踏まえた教師の行為」と「4. 授業における子どもの実態」という学生に関するカテゴリーの比率が増加した。

　→研究授業の実施において、２期目になると１期の時より子どもの実態が注目されているという特徴を意味する。初任者体育教師は、他のメンバーからより多くの子どもの学びの実態や効果などのフィードバックを得て、またより多くの子どもの認知や対応に関する方法や経験を聴くことで、子どもを理解する能力を向上させたと推察された。

表6　反省内容のカテゴリー分類

反省内容（実数 個，割合 %）								
	B 1期目	B 2期目	W 1期目	W 2期目	P 1期目	P 2期目	S 1期目	S 2期目
1.授業デザイン	5 (33.3)	2 (10.5)	8 (57.1)	2 (8.0)	4 (36.3)	4 (21.1)	3 (13.6)	2 (9.5)
2. 授業における教師の行為	3 (20.0)	9 (47.4)	3 (21.4)	11 (44.0)	4 (36.3)	9 (47.4)	13 (59.1)	10 (47.6)
3. 子どもの実態を踏まえた教師の行為	0	1 (5.3)	1 (7.2)	5 (20.0)	0	1 (5.2)	0	1 (4.8)
4. 授業における子どもの実態	1 (6.7)	2 (10.5)	2 (14.3)	3 (12.0)	1 (9.1)	4 (21.1)	1 (4.6)	5 (23.8)
5. 成果	6 (40.0)	2 (10.5)	0	0	0	0	2 (9.1)	1 (4.8)
6. 授業と直接に関係なし	0	3 (15.8)	0	4 (16.0)	2 (18.2)	1 (5.2)	3 (13.6)	2 (9.5)
合計	15（100）	19（100）	14（100）	25（100）	11（100）	19（100）	22（100）	21（100）

5. 今後の課題

以上の分析から、授業研究は初任者体育教師の反省能力の向上を生むことが明らかになった。しかし、授業研究における初任者体育教師の反省レベルが全体として低く、反省内容がまだ教師に関する内容に偏重していた。

今後の課題として、授業研究は授業改善や教師成長の方法として実際に応用される時に、その実践過程の工夫が必要であると考えられた。

実践のレベルで、教師が低レベルの反省活動を繰り返すことを避けるために、授業研究の実施において、教師に授業の省察に関する理論と実践の指導を提供することが求められる。

制度のレベルで、授業研究という形の研究活動を現職研修制度に、特に校内研修として位置づけ、その時間を保証することが求められる。

ご静聴ありがとうございました